

重度・重複障害児教育の充実に必要なこと

松田 直



I . 私の50年(1)

- 1964年 大学入学 文系→心理学
- 3年次の「心理学概論」(梅津八三先生)で、盲聾児へのかかわりを知り、驚愕。相互障害状況という捉え方。
- 学部の卒論と修士論文で、重度の知的障害児の認知面に関する実験研究。データを取らせてもらい、統計的に分析、その範囲で指摘できることを整理・考察。
- こういう研究方法で良いのか？ 子ども一人一人の実態に迫っていく必要があるのではないか？

I . 私の50年(2)

- 博士課程で重度知的障害児、重症心身障害児の認知面の学習について実践研究に着手。
- 1975年 国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部に就職。辻村泰男所長と出会う。
- 大坪明德部長の診察場面から学ぶ。
- 保護者の話しに耳を傾ける。
- ゼロから見上げる視点が基本。
- 家庭・通園施設・学校など、子どもの生活場面全体を視野に入れる。
- 継続してかかわること。

I .私の50年(3)

- 国立特殊教育総合研究所 約20年
- 群馬大学教育学部障害児教育講座 16年
- 高崎健康福祉大学人間発達学部 8年

教員養成・保育士養成・現職教員研修・学校での授業研究
実践研究

- コミュニケーションルーム「こどものへや」
社会福祉法人みなと舎

国立久里浜養護学校で学んだ重度・重複障害児
通所・入所



Ⅱ. ケースの紹介(1)

- Tさん：1977年2月生まれ、染色体10番の異常。
- 国総研の教育相談：初診は生後4か月、1歳2か月からは継続的なかわり。聴力検査も実施。
- 療育・教育：乳幼児期からリハビリ、通園施設での保育、国立久里浜養護学校幼稚部、地域の小学校特殊学級、地域の養護学校中学部・高等部。
- 卒後：地域の生活介護事業所
- 松田が群馬大学に異動後もかわりは継続。
- 48年目の現在も、みなと舎「ゆう」で「かわり相談」として継続中。

Ⅱ. ケースの紹介(2)

- 動画

1歳6か月 : 玩具に手を出す

4歳3か月 : 大人を相手に手遊びをする

6歳0か月 : 洗面をする 写真を見て身振りをする

11歳5か月 : 絵+平仮名のカードでカルタをする

15歳2か月 : トーキングエイドで文字を探す

23歳7か月 : 見本を見てトーキングエイドで綴る

26歳0か月 : 選んだカードの文字をトーキングエイトで綴る

47歳10か月 : 一つの話題でいくつか綴る

Ⅲ. 実践研究等を通して、今、思うこと

重度・重複障害児の場合

- 「準ずる教育」からの脱却が不可欠。
- 「個」をベースにした療育や教育を創造すること。
- 成長に応じて、「集団学習」や社会的体験の学習を増やしていくこと。
- 子どもと教員のかかわり合いをベースにすること。
- 学校教育と生涯学習の接続を見直すこと。
- 教員養成や現職教員研修のあり方を見直すこと。
- 特別支援教育の教員養成にかかわる大学教員の資質の向上を図ること。

非不可能性(梅津八三)

ご清聴ありがとうございました。

皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

参考

梅津八三：論説「重度・重複障害者の教育のあり方」

文部省 特殊教育 季刊-4 2-5

(昭和49年3月31日 発行)